

『俗語解』の論点

氏岡 真士 閻 小妹

俗語解のテキスト 俗語解の研究史 岩瀬本 新資料 唐話辞書

1.

『俗語解』は江戸時代の唐話辞書、いわば当時の中日辞典である。唐話、つまり中国の俗語に関する辞書のひとつとして、いくつもの論考が発表されてきた。なにぶん大部なものであり、またさまざまな写本の形で伝わっているため、先行研究の論点は多岐にわたる。本稿ではそれらを整理したうえで、新資料をふくめて若干の検討をおこない、主要なテキストの関係を考えてみたい。

2.

石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』（1940年。いま清水弘文堂書房、1967年による）は、約3ページにわたり『俗語解』について解説している。まず冒頭部分を、現代の字体と仮名遣いに改めたうえで（以下同様）抜粋しよう。

沢田氏手沢の「俗語解」という八冊の写本が帝国図書館にある……小説伝奇の俗語をいろは順に配列して注解を加えたもので、間々唐音が附してあり、注解には夫々引用書名を記し、尚お編者の説が加えてある……序跋識語一切なく編者の知るべき由もないが、「沢田氏記」の朱方印があることと、同館所蔵の「奚疑斎叢書」という四冊の自筆本に依り沢田一斎の筆蹟なることを知る。

沢田氏は沢田一斎（1701～1782）、帝国図書館はもちろん現在の国会図書館であり、このテキストは現存する（本稿では、以下「沢田本」とよぶ）。

次の段落には、他のテキストとして以下の4種を記す。

帝国図書館の「俗語彙編」と題する五冊本。

岩瀬文庫の八冊本[△]

「神山潤次先生より頂戴した」四冊本

松井簡治博士所蔵の若干巻（「全斎蔵版」の罫紙使用）

『俗語彙編』五冊も現在、国会図書館が蔵する。岩瀬文庫はいま愛知県の西尾市立図書館にあるが、その『俗語解』は十二冊から成る（本稿では、以下「岩瀬本」とよぶ）。石崎氏が「頂戴した」本はいま九州大学附属図書館石崎文庫に蔵され、同館はさらに逍遥文庫にも、旧秋月藩の磯淳や旧福岡藩の宗盛年がかつて蔵した別の四冊本を有している（久保尾俊郎「磯淳の旧蔵書」、『ふみくら』79、2010年）。東京文理科大学教授であった松井簡治旧蔵の若干巻は、しかし筑波大学附属図書館所蔵の三冊本ではなく、後述する大橋敦氏の論文（2006年）がいう静嘉堂C本である。

さて石崎氏は、その次の段落で「引用書目」の一覧と「附録」五種のタイトルを紹介するが、「附録」が他本に無いというのは誤解か、もしくは一本を「頂戴した」ゆえの遠慮かとみられる。

最後の段落では内容の特徴を検討し、「沢田一斎と特殊の関係を有すること丈[だけ]は動かさない」とまとめたあと、

本書を校訂したものは即ち市川清流の「雅俗漢語訳解」である。但し附録は「顔色差別」一項に止る。明治十年の刊行。

と結ぶ。そこに列挙される特徴を、順に箇条書きの形で抜粋しておこう。

- 人物では陶冕・白駒の言を引くこと最も多く……次は東涯・徂徠の言を引く。
- 書名を略しているものが多いようである。陶冕のは「水滸伝訳解」を[、]東涯のは乗燭談・品字箋[カッコ無]を略しているようである。
- [陶冕＝陶山南濤の、水滸伝]「訳解」は宝暦七年[1757]の刊行であり、岩瀬文庫本は文化九年[1812]の日付があるから、自ら成立年代に制限がある。
- [岡]白駒のは不明で或は直接伝授されたものか或はその「水滸全伝訳解」等かは明かでない……。
- 自らは「余」と称して時々陶冕の説を駁しているから、陶冕でないことは勿論、白駒でもない。
- 引用書目中「小説奇観」の名は白駒の「[小説]奇言」の奥付にある嗣刻書目中、及び沢田一斎の「[小説]粹言」の奥付に「小説奇観十回嗣刻」と見えるのみで、他に其の書名すら見えない稀観書である。
- 「照世杯」は……奇言・粹言の予告にも見え、訓点をした[清田]儋叟は一斎の後輩ではあり、本書は一斎の見得る処にあったことは事実である。

最後の点については、訓点の無い「原刻は甚だ稀れ」とも指摘している。

以上、石崎又造の見解は『俗語解』研究の出発点というにふさわしい、多くの論点を含んでいる。やや詳しく紹介したゆえんである。

3.

その後、『俗語解』の研究は次第に進んでゆく。以下におもな関連の論考を挙げてみよう。

- 入矢義高「解題」（『雅俗漢語訳解』油印本、1951年；同朋舎、1976年）
- 鳥居久靖「明治期における中国俗語辞書について—日本中国語学史稿之三—」（『天理大学学報』第38輯、1962年）
- 岡田袈裟男「森島中良晩年探索：あるいは一文人の言語宇宙」（『日本文学』1983年1月号）
- 岡田袈裟男「中日辞典の構想—『俗語解』改編と方法」（『江戸の翻訳空間—蘭語・唐話語彙の表出機構』笠間書院、1991年；同[新訂版]、2006年）
- 石上敏「森島中良晩年の文事—「俗語解」を中心に—」（無窮会『東洋文化』71、1993年）
- 村上雅孝「『俗語解』と『雅俗漢語訳解』—近世唐話学の行方—」（『文芸研究』第103号、1996年。『近世漢字文化と日本語』おうふう、2005年）
- 村上雅孝「『俗語解』小考」（加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院、1997年。『近世漢字文化と日本語』おうふう、2005年）
- 村上雅孝「『雅俗漢語訳解』の成立について」（『日本近代語研究』第4集、2005年）
- 大橋敦「立正大学図書館蔵『俗語解』について—森島中良改編本との比較を中心に—」（『立正大学国語国文』43号、2005年）
- 大橋敦「『俗語解』の伝本と『雅俗漢語訳解』—森島中良・太田全斎・蒲阪青荘との関わりから—」（『立正大学国語国文』44号、2006年）
- 玄幸子「岩瀬文庫蔵『俗語解』にみる江戸後期漢籍受容の実態—『字彙』『字彙補』『正字通』『訓蒙字会』を例として—」（『高田時雄教授退職記念東方学研究論集』東方学研究論集刊行会、2014年）

このうち入矢氏は、明治の『雅俗漢語訳解』を校訂するに際して、『俗語解』の天理図書館蔵本（京都帝大教授だった藤井紫影＝乙男の旧蔵書）と京都大学人文科学研究所蔵本（いずれも七冊）の2種を用いている。そして『雅俗漢語訳解』は、

『俗語解』の「原形を殆どそのままに存して、さほど大きな更改は加わっていない」と断じている。ただし「『小説字彙』と共通するものが幾らかある」とも述べている。

鳥居氏はまず、『俗語解』の岩瀬本は原本の誤読らしき語に抄写者の注記がある点から、沢田本に「代用することができる」と評価している。ただし沢田本は実見していないという。つぎに人文研本と『雅俗漢語訳解』とを、「一」「不」字に属する語彙を例に比較し、また全体的にみても、『雅俗漢語訳解』の語数が増えているとして、入矢説に疑問を呈する。そして増補された語彙は多く『小説字彙』にみえること、その増補は市川清流が校合定稿に用いたという『俗語解』の二本ですでになされていたであろうことを説く。

この二つの論考のあと、1970年代初めから中頃にかけて、長沢規矩也編『唐話辞書類集』全20巻および別巻1冊が汲古書院から出版される。その第10巻(1974年)・第11巻(1976年)には、『俗語解』の長沢規矩也蔵本と静嘉堂文庫蔵本が収められた。前者はのち関西大学附属図書館長沢文庫に帰す(本稿では以下「長沢本」とよぶが、それは柱題に「南華書堂」とある罫紙に書かれ、「石経楼蔵」および印影不鮮明な計2つの蔵書印が見られる)。後者は森島中良(1756?~1810)によって、従来のイロハ順から画数引きに改編されているが、未完に終わっている(本稿では以下「(森島)改編本」とよぶ)。

岡田氏はこの森島中良に注目しつつ、『俗語解』の国会本・長沢本・森島改編本と『俗語彙編』および『雅俗漢語訳解』から、<イの部>に属すべき語彙の異同を比較している。そして『俗語解』の諸写本は内容が未整備であることを指摘し、原本の沢田一斎編者説に否定的な見解を示している。その際、岩瀬本をも参照している。そのうえで、この改編本が未完に終わったこと、それが森島中良の晩年にもつ意味などを、改編本の書き込みや森島手抄の『剪灯新話句解』『警世通言』によって論じている。

石上氏は、森島改編本が伝存不明の巻五~十も成立していたことや、それが森島中良の晩年にもつ意味などを、改編本の書き込みや切除部分、また森島による「小説十様錦」「惜字帖」などにより論じている。

さて村上氏は、『雅俗漢語訳解』と対照する前提として、『俗語解』国会本(沢田本)・類集本(長沢本)・岩瀬本と『俗語彙編』および『雅俗漢語訳解』から「辺の〔へノ〕部」を比較し、のちには『俗語解』国会本と『雅俗漢語訳解』にしぼって、さらに「は〔ハ、波〕」の部から300語を比較している。氏によれば『俗語解』・『俗語彙編』のテキスト間に「さほどの違いはない」が、たとえば類集本が国会本の欄外書き入れを本文に取り込むように、国会本に比して他のテキストは所収語彙

が若干増えている。また氏は『俗語解』国会本の見出し総語数を8,566と算出し、そのうち350例以上に注記等が全くないため、刊本が無いこととも相まって未定稿であろうことを示す。また注記における邦人の説、とくに岡白駒や陶山南濤のその引用態度や、小説三言における岡白駒や沢田一斎の釈義・施訓との比較から、『俗語解』沢田一斎編者説を強く示唆している。

大橋氏は、まず従来未紹介の立正大学図書館蔵『俗語解』六冊は、森島中良が改編作業に利用した「伍石居本」（存否未詳）系統の転写本であることを、森島改編本との語彙や書き入れの比較によって論じた。そのうえでこの立正本と、静嘉堂文庫に蔵される『俗語解』3種のうちC本（3冊。イロハの部・ニホヘトの部・附録）とが、市川清流により『雅俗漢語訳解』の校合定稿に用いられたという『俗語解』の二本であると論ずる。ただし、これらの段階で大規模な語彙の増補が行なわれたという鳥居説には、否定的である。この論述の過程で、静嘉堂C本には太田全斎と蒲阪青荘の説が注記されていることも、長沢規矩也「静嘉堂所蔵江戸時代編纂支那語関係書籍解題」（『長沢規矩也著作集』第5巻、汲古書院、1985年、初出は1938年）の示唆を得て明らかにしている。また静嘉堂A本2冊（チ〜クの部）や国会図書館蔵『俗語彙編』五冊（イ〜テの部）は、立正本と同じく「伍石居本」から派生したであろうことも指摘している。ちなみに静嘉堂B本が、『唐話辞書類集』第11巻所収本である。

玄氏は岩瀬本『俗語解』が文化九年壬申のとし八月（1812年の9月）に書写された点を重視し、当時の小学書受容状況を反映する資料とみなす。そして引用頻度の高い『字彙』等4種の引用文を分析し、収録語彙数にくらべて引用箇所が極端に少ないこと、反切や音注への意識が低く、漢語の俗語が「日本の訓読の中で捉えられていた」こと、などをもって小結としている。

4.

上述の諸論考のうち、とくに大橋氏の研究によって、『俗語解』の「伍石居本」から森島改編本をへて明治の『雅俗漢語訳解』に至る流れは、およその見通しがたったと言ってよかろう。また『俗語解』と沢田一斎の関係や、沢田本が比較的原初的であろうことは、村上氏の研究によって蓋然性が高まったように思われる。しかし岩瀬本に一定の価値をみとめる論者も複数あるし、長沢本は影印されており頻繁な利用が予想される。他にも多くのテキストがあるものの、その実態や相互関係あるいは受容状況など、不明の点もいまだ少なくない。

以下ではまず、これまで未検討の資料からひとつ取り上げたい。すなわち京都大学文学部が有する『俗語解』八冊であり、それは小津桂窓の旧蔵本である（以下「小

津本」とよぶ)。第一冊の表紙右上に「西莊文庫」の蔵書印が捺され、さらに「月百三十一、全八」という書き込みもある。なお第八冊末葉にも「桂窓」の印がある。いま天理図書館に『西莊文庫書目録・月』が蔵され、「和漢の漢詩文を中心に、字書・類書・高僧語録・経典などを収録」という（中尾和昇「関西大学図書館蔵小津桂窓『西莊目録』一解題と翻刻一」、『千里山文学論集』第85集、2011年）。書き込みは、これに対応する。

小津桂窓（久足。1804～1856）は伊勢松阪の豪商で、愛書家として、また曲亭馬琴との交友でも知られる（山本卓「新収『西莊文庫目録』—小津桂窓と西莊文庫—」、『関西大学図書館フォーラム』第10号、2005年。菱岡憲司『小津久足の文事』ペリカン社、2016年）。ちなみに馬琴も『俗語解』を蔵していたが、それが現存するかどうかは不明である（神田正行「曲亭蔵書の形成過程Ⅱ」、『馬琴と書物—伝奇世界の底流—』八木書店、2011年）。

なお小津本は、残念ながら「ス」の部を欠いている。ここに属する語彙は「吹弾歌舞」と「枢密院」の2語のみであり（沢田本）、後述の点も考え合わせれば書き漏らしと思われるが、じつは長沢本も「ス」の部を欠くため、写本の系統を考えるうえでなにかの手がかりになるかも知れない。

5.

前述のように村上氏は『俗語解』「辺の部」の比較・分析をおこなった（「『俗語解』と『雅俗漢語訳解』—近世唐話学の行方—」。なお沢田本の見返しには「伊呂波仁保辺登」の漢字表記がある。ただし本文では「へノ部」。『雅俗漢語訳解』は「邊之部」）。小津本の「へノ部」についてみると、所収語彙数は119で、国会本（沢田本）の120より少ない（ほかは類集本（長沢本）124、岩瀬本129、俗語彙編125、訳解163とされる）。小津本は「騙口」の1語が少ないのである。

ちなみに村上氏は、「類集本は、国会本が欄外に書き入れている部分を本文内に取り込んでいるので国会本よりは新しいものと考えられる」と指摘する。少なくとも「へ」の部において、国会本（沢田本）の書き入れは確認できないが、類集本（長沢本）は偏向・偏区・偏僻・偏生・偏目が多いいっぽう、挽腕を欠き、けっきょく計124語を収めている。

村上氏の論点を参考に見てゆくと、たとえば小津本は、沢田本にくらべて唐音表記が少ない。国会本の31語に対し、小津本は「扁豆（テウ）〔沢田本はデウ〕」「辨白（ヘンヘツ）〔沢田本はペンペツ〕」「平生（スエン）〔沢田本はビンスエン〕」「平常（チャン）〔沢田本はヂャン〕」「平欺（キイ）〔沢田本同〕」「敵〔＝敵〕

庄(チャン)〔沢田本同〕の6語しか無く、かつ沢田本より簡略化されている(長沢本は、小津本の6語を含め計24語に唐音が付される)。

また沢田本で語釈が無いのは8語だが(騙賊・貶磨・平生・平常・平等・平白地・弊撥・劈脊)、小津本はさらに「徹〔=徹〕庄」にも語釈が無い(沢田本には「自分ヤシキ」とある。ちなみに長沢本の場合は、偏僻・騙賊・貶磨・平生・平常・平等・平白地・弊撥の8語に語釈が無い)。

ほかに出典や注解・訳語の具体例を見た場合、「箴圈児」に対して沢田本・長沢本は『西洋記』と正しく記すのに対して、小津本は『西詳記』に誤っている。

こうした諸点や前述のように「スノ部」を欠く点、さらには沢田本ほど書写年代が遡らないであろう点などをふまえると、小津本はあくまで江戸後期における『俗語解』の写本のひとつであり、沢田本より古形をとどめるとは考えにくい。

ただ長沢本もふくめた三者の関係は、なお検討を要する。たとえば前述の岡田氏が指摘するように、「イ」の部「一」の項の場合、語彙数は沢田本209語に対し、長沢本は5つ少ない204語である。ところが小津本は、沢田本と同じ209語を数える。ただし「一遭」の「遭」が空欄になっている。

三者はいずれも半葉10行である。そして沢田本と小津本は各行2語を基本とし、それぞれに注釈が小字2行で記される。注釈が多ければ1行1語となったり、その影響で次の語が下段から始まることもある。ところが長沢本の場合は注釈が基本的に小字1行となり、したがって各行1語が基本になっている。

すると小津本と長沢本は、系統的には沢田本から枝わかれした2本であることが考えられる。ただし両者ともに「ス」の部を欠く点をふまえれば、三者の中間に未知の1本を、さらに想定すべきかもしれない。

6.

では、やはり江戸後期の写本である、岩瀬本はどうだろうか。

岩瀬本「ヘノ部」は偏向・偏区・偏僻・偏生・偏目と挽脰膊の6語をいずれも有し、ほかに匾擔・平川・驚口氣・驚着鳥氣・箴頭・箴線才・劈頸の7語が多いうえ、さらに末尾には返・冪■〔𠂔離〕・聘釵・乏趣の4語も加わっている。このうち少なくとも返〔璧〕と冪■〔𠂔離〕は、すでに「ハ」の部に見えている。したがって合計は136語となる。

注記が無いのも貶磨・平生・弊撥・劈脊の4語にとどまる。いっぽうで、発音表記があるのは驚拗の1語のみで、その上字右側に「ヘツ」とあり、左側には下字にわたって「玉必列切弓戻」の書き込みがある。つまり唐音ではなく、『玉篇』から

反切と語釈をおぎなつたものであろう（なお村上氏は、岩瀬本が「平常」に「ツネツネ」と注記することを指摘している。これは下部に記され、唐音でもない）。

「イ」の部「一」の項の語彙数は、岩瀬本では219語を数えるから、沢田本・小津本より10語多い。半葉10行で各行上下2語、注釈は小字2行を基本とする点は、沢田本・小津本と同様である。

ところで前述のように玄氏は、このテキストに引用される韻書や字書などのうち、出現頻度の高い4種の引用文を、それぞれの原本と対照した。すなわち以下の個所である。

『字彙』：嬌嬌（ハの部）・冪■〔四離〕（ハの部）・咄（トの部）・鬧（キの部）・儘（シの部）

『續字彙』：畜（ハの部）・爸（ハの部）・闖門（チの部）・丟（リの部）・岡（罫）（カの部）・幹事（カの部）・志忑（タの部）・爹（タの部）・姐（タの部）・乖巧（クの部）・岔路（フの部）・骨朵（コの部）・扛擡（コの部）・儘教（シの部）・們（モの部）

『正字通』：學究（カの部）・掉搶（タの部）・爹（タの部）・老相（ラの部）・扮戲（スの部〔雜劇名色〕）・心窩兒（シの部）

『訓蒙字會』：鋪家（ホの部）・大娘娘（タの部）・彈的（タの部）・駟儉（ソの部）・貨郎（クの部）・風漢（フの部）・細（佃）戸（サの部）・稍（梢）子（シの部）・把戲的（スの部〔雜劇名色〕）

これらの個所について、小津本を参照してみると、その記述は岩瀬本より少ない場合がある。（1）ハの部「冪■〔四離〕」は、岩瀬本が「『字彙』一一、婦人所戴者。アラキ布ニテ作ル……」とあるのに対して、小津本は「アラキ布ニテ作ル……」と始まり、『字彙』の引用は無い。（2）クの部「乖巧」は、岩瀬本が「サルガシコイコト。『読〔=続〕字彙』乖、又公西切、音基……」とあるが、小津本は「サルカシコイ」で終わっている。（3）カの部「学究」は、岩瀬本が『正字通』を引くのに対し、小津本は注記が無い。（4）シの部「心窩兒」は、岩瀬本が「ムナサキ、ミソヲチ」のあと『正字通』を引くのに対し、小津本は「ムナサキ、ミゾヲチ」としか記さない。（5）タの部「大娘娘」は、岩瀬本が「大ヲクサマ」のあと『訓蒙字會』を引くのに対し、小津本は「大ヲクサマ」としか記さない。

ちなみに上記の5か所のうち、沢田本・長沢本は（1）（4）が小津本と同様に注記が少ない。（2）（3）（5）は岩瀬本と同様だが、（2）は『続字彙』と正

しく記すし、(3) (5) の究・娘に「クン」「ニャン」と唐音らしきものを付す点は、沢田本・長沢本のほうが詳しい。

とはいえ、このように見てゆくと、やはり全体的には岩瀬本のテキストとしての充実ぶりがうかがえる。では岩瀬本は、かつて鳥居氏が評したように、沢田本に「代用することができる」テキストなのだろうか。

7.

岩瀬本については、西尾市岩瀬文庫の「古典籍書誌データベース」が詳しく情報を記しており、ぜひ参照しておきたい。たとえば第1・3・7・11冊巻首(すなわちイ・チ・ヤ・エの部の冒頭)に「高取植村文庫」の蔵書印があり、大和高取藩主で老中格だった植村家長(1753～1828)の旧蔵書であること、したがって書写者たちは「或いは高取藩士か」と指摘している。

またこの『俗語解』を森島中良編と推定し、第4冊「駕座」(カの部分)や第12冊「康熙聯対」(雑劇名色)に対して「中良按ニ」云々とあること、他にも「良」の按語が見えることを根拠としている。

じつは岩瀬本は、大橋氏の詳論した立正本の特徴と一致点が多い。たとえば各丁オモテの柱に見出し語の頭字を記したり、あるいは各部の末尾に多く漢字一字の見出し語が、あまり注解も無く羅列されているなどである。もちろん「(中)良」の按語も二か所にとどまらない。

筆者らは立正本未見のため、詳しくは別に論じたいが、岩瀬本もまた大橋氏の説くところの、森島中良改編本に利用されたという「伍石居本」系統の、テキストのひとつなのであろう。そして岩瀬本の充実ぶりは、「(中)良」の按語の存在から見て、森島中良による増補の可能性がある。少なくとも、沢田本や長沢本あるいは小津本にくらべて、岩瀬本は『俗語解』の新しい段階を示す写本であるように思われる。

※本稿執筆に当たりJSPS科学研究費補助金18K00315、18K00351の助成を受けている。

(氏 岡 真 士 信州大学 人文学部 教授)

(閤 小 妹信州大学 全学教育機構 教授)

2019年2月25日受理 2019年3月5日採録決定